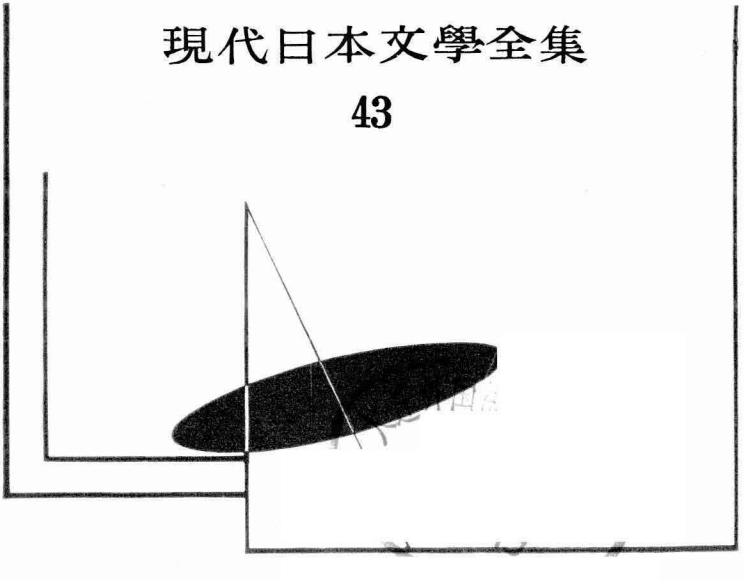
梶井基次郎
三好達治
堀辰雄

集

現代日本文學全集

43



筑摩書房版

現代日本文學全集 43

梶井基次郎
三好達治
堀辰雄集

昭和二十九年五月二十日 印刷
昭和二十九年五月二十五日 發行

著者 梶井基次郎 三好達治 堀辰雄

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁

東京都新宿區改代町二三
印刷者 多田基

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京一六五七六八

整版 株式會社精興社
印刷 多田印刷株式會社
製本 株式會社高陽堂

梶井基次郎集　目次

檸檬……五
城のある町にて……八
泥濘……二〇
路上……二五
過去……二八
雪後……三〇
ある心の風景……三四
Kの昇天……三九
冬の日……四三
櫻の樹の下には……五〇
器樂的幻覺……五三
闇への書……五四
蒼穹……五七
筧の話……五九
冬の蠅……六一
ある崖上の感情……六七
愛撫……七四
闇の繪卷……七六
交尾……七九
のんきな患者……八三
溫泉……九四

三好達治集　目次

測量船……九九
南窗集（抄）……一一六
閒花集（抄）……一一八
山果集（抄）……一二一
艸千里（抄）……一二五
一點鐘（抄）……一三四

堀　辰雄集　目次

朝菜集（抄）……一四四
花筐……一四九
故郷の花（抄）……一六四
砂の砦（抄）……一七五
駱駝の瘤にまたがつて……一八四
ルウベンスの僞畫……二一三
聖家族……二二〇
美しい村……二三一
風立ちぬ……二五六
かげろふの日記……二九〇
榆の家……三〇八
菜穂子……三二七
曠野……三六二
十月……三六九
プルウスト雜記……三八〇
雪の上の足跡……三八九
梶井基次郎（山本健吉）……三九五
三好達治君への手紙（桑原武夫）……四〇一
堀　辰雄への手紙（神西　清）……四〇九
解説……四一五
年譜……四二二

裝幀　恩地孝四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

梶井基次郎集

文尾 ③

梶井基次郎

その一 一三行目

星空を見上げると、音もしないで何匹も蝙蝠が飛んでゐる。その姿は見えないが、瞬間瞬間光を消す星の工合から、気味の悪い畜類の飛んでゐるのが感じられるのである。

人々は寂静まつてゐる。

――私の立つてゐるのは、半ば朽ちかけた、家の物干場だ。

行 2

檸檬

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終壓へつけてゐた。焦躁と云はうか、嫌惡と云はうか――酒を飲んだあとに宿酔があるやうに、酒を毎日飲んでゐると宿酔に相當した時期がやつて來る。それが來たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神經衰弱がいけないのではない。また脊を燒くやうな借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音樂も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなつた。蓄音器を聽かせて貰ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し續けてゐた。

何故だかその頃私は見すぼらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覺えてゐる。風景にしても壞れかかつた街だとか、その街にしても他處他處しい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが轉してあつたりむさくるしい部屋が覗いてゐたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて土に歸つてしまふ、と云つたやうな趣きのある街で、土塀が崩れてゐたり家並が傾きかかつてゐたり――勢ひのいいのは植物だけで、時とするとびつくりさせるやうな向日葵があつたりカンナが咲いてゐたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、不圖、其處が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙臺とか長崎とか――そのやうな市へ今自分が來てゐるのだ――といふ錯覺を起さうと努める。私は、出來ることなら京都から逃げ出して誰一人知らないやうな市へ行つてしまひたかつた。第一に安靜。がらんとした旅館の一室。清淨な蒲團。匂ひのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。其處で一月ほど何も思はず横になりたい。希はくは此處が何時の間にかその市になつてゐるのだつたら。――錯覺がやうやく成功しはじめると私はそれからそれへと想像の繪具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覺と壞れかかつた街との二重寫しである。そして私はその中に現實の私自身を見失ふのを樂しんだ。

私はまたあの花火といふ奴が好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安つぽい繪具で赤や青や、樣ざまの縞模樣を持つた花火の束、中山寺の星下り、花合戰、枯れすすき。それから鼠花火といふのは一つづつ輪になつてゐて箱に詰めてある。そんなものが變に私の心を唆つた。

それからまた、びいどろといふ色硝子で鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉が好きになつた。またそれを嘗めてみるのが私にとつて何ともいへない享樂だつたのだ。あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなつて落魄れた私に蘇つてくるせゐだらうか、全くあの味には幽かな爽かな何となく詩美と云つたやうな味覺が漂つてゐる。

察しはつくだらうが私にはまるで金がなかつた。とは云へそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅澤といふことが必要であつた。二錢や三錢のもの――と云つて贅澤なもの。美しいもの――と云つて無氣力な私の觸角に寧ろ媚びてくるもの。――さう云つたものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれてゐなかつた以前私の好きであつた所は、例へば丸善であつた。赤や黄のオードコロンやオードキニン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模樣を持つた琥珀色や翡翠色の香水壜。煙管、小刀、石鹸、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあつた。そして結局一等いい鉛筆を一本買ふ位の贅澤をするのだつた。然し此處ももうその頃の私にとつては重くるしい場所にすぎなかつた。書籍、學生、勘定臺、これらはみな借金取の亡靈のやうに私には見えるのだつた。

ある朝――その頃私は甲の友達から乙の友達へといふ風に友達の下宿を轉々として暮してゐたのだが――友達が學校へ出てしまつたあとの

空虚な空氣のなかにぽつねんと一人取り殘された。私はまた其處から彷徨ひ出なければならなかつた。何かが私を追ひたてる。そして街から街へ、先に云つたやうな裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち留つたり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、たうとう私は二條の方へ寺町を下り、其處の果物屋で足を留めた。此處でちよつと其の果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知つてゐた範圍で最も好きな店であつた。其處は決して立派な店ではなかつたのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な臺の上に並べてあつて、その臺といふのも古びた黑い漆塗りの板だつたやうに思へる。何か華やかな美しい音樂の快速調の流れが、見る人を石に化したといふゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムに凝り固まつたといふ風に果物は並んでゐる。青物もやはり奥へゆけばゆくほど堆高く積まれてゐる。——實際あそこの人參葉の美しさなどは素晴らしかつた。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

また其處の家の美しいのは夜だつた。寺町通は一體に賑かな通りで——と云つて感じは東京や大阪よりはずつと澄んでゐるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出てゐる。それがどうした譯かその店頭の周圍だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二條通に接してゐる街角になつてゐるので、暗いのは當然であつたが、その隣家が寺町通りにある家にも拘らず暗かつたのがはつきりしない。然しその家が暗くなかつたら、あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思ふ。もう一つはその家の打ち出した廂なのだが、その廂が眼深に冠つた帽子の廂のやうに——これは形容といふよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をやけに下げてゐるぞ」と思はせるほどなので、廂の上はこれも眞暗なのだ。さう周圍が眞暗なため、店頭に點けられた幾つもの電燈が驟雨のやうに浴せかける絢爛は、周圍の何者にも奪はれることなく、肆にも美しい眺めが照らし出されてゐるのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んで來る往來に立つて、また近所にある鑑屋の二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物屋の眺めほど、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀だつた。

その日私は何時になくその店で買物をした。といふのはその店には珍らしい檸檬が出てゐたのだ。檸檬などごくありふれてゐる。が其の店といふのも見すぼらしくはないまでもただあたりまへの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。一體私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの繪具をチューブから搾り出して固めたやうなあの單純な色も、それからあの丈の詰つた紡錘形の恰好も。——結局私はそれを一つだけ買ふことにした。それからの私は何處へどう歩いたのだらう。私は長い間街を歩いてゐた。始終私の心を壓へつけてゐた不吉な塊がそれを握つた瞬間からいくらか弛んできたと見えて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗かつた憂鬱が、そんなものの一顆で紛らされる——或ひは不審なことが、逆説的な本當であつた。それにしても心といふ奴は何といふ不思議な奴だらう。

その檸檬の冷たさはたとへやうもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしてゐていつも身體に熱が出た。事實友達の誰彼に私の熱を見せびらかすために手の握り合ひなどをしてみるのだが、私の掌が誰れのよりも熱かつた。その熱のせゐだつたのだらう、握つてゐる掌から身内に浸み透つてゆくやうなその冷さは快いものだつた。

私は何度も何度もその果實を鼻に持つて行つては嗅いでみた。それの產地だといふカリフォルニヤが想像に上つて來る。漢文で習つた「賣柑者之言」の中に書いてあつた「鼻を撲つ」といふ言葉が斷ぎれに浮んで來る。そしてふかぶかと胸一杯に匂やかな空氣を吸ひ込めば、つひぞ胸一杯に呼吸したことのなかつた私の身體や顏には溫い血のほとぼりが昇つて來て何だか身内に元氣が目覺めて來たのだつた。……

實際あんな單純な冷覺や觸覺や嗅覺や視覺が、ずつと昔からこればかり探してゐたのだと云ひたくなつたほど私にしつくりしたなんて私は不思議に思へる——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往來を輕やかな昂奮に彈んで、一種

誇りかな氣持さへ感じながら、美的裝束をして街を濶歩した詩人のことなど思ひ浮べては歩いてゐた。汚れた手拭の上へ載せてみたりマントの上へあてがつてみたりして色の反映を量つたり、またこんなことを思つたり、

――つまりは此の重さなんだな。――

その重さこそ常づね尋ねあぐんでゐたもので、疑ひもなくこの重さは總ての善いもの總ての美しいものを重量に換算してきた重さであるとか、思ひあがつた諧謔心からそんな馬鹿げたことを考へてみたり――何がさて私は幸福だつたのだ。

何處をどう歩いたのだらう、私が最後に立つたのは丸善の前だつた。平常あんなに避けてゐた丸善がその時の私には易やすと入れるやうに思へた。

「今日は一つ入つて見てやらう」そして私はづかづか入つて行つた。

然しどうしたことだらう、私の心を充してゐた幸福な感情は段々逃げて行つた。香水の壜にも煙管にも私の心はのしかかつてはゆかなかつた。憂鬱が立て罩めて來る、私は歩き廻つた疲勞が出て來たのだと思つた。私は畫本の棚の前へ行つて見た。畫集の重たいのを取り出すのさへ常に增して力が要るな！　と思つた。然し私は一册づつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、克明にはぐつてゆく氣持は更に湧いて來ない。然も呪はれたことにはまた次の一册を引き出して來る。それも同じことだ。それでゐて一度バラバラとやつてみなくては氣が濟まないのだ。それ以上は堪らなくなつて其處へ置いてしまふ。以前の位置へ戻すことさへ出來ない。私は何度もそれを繰り返した。たうとうおしまひには日頃から大好きだつたアングルの橙色の重い本まで尙一層の堪へ難さのために置いてしまつた。――何といふ呪はれたことだ。手の筋肉に疲勞が殘つてゐる。私は憂鬱になつてしまつて、自分が拔いたまま積み重ねた本の群を眺めてゐた。

以前にはあんなに私をひきつけた畫本がどうしたことだらう。一枚一枚に眼を晒し終つて後、さてあまりに尋常な周圍を見廻すときのあの變にそぐはない氣持を、私は以前には好んで味はつてゐたものであつた。……

「あ、さうださうだ」そのとき私は袂の中の檸檬を憶ひ出した。本の色彩をゴチヤゴチヤに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。「さうだ」

私にまた先程の輕やかな昂奮が歸つて來た。私は手當り次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き拔いてつけ加へたり、取り去つたりした。奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなつたり青くなつたりした。

やつとそれは出來上つた。そして輕く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据ゑつけた。そしてそれは上出來だつた。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチヤガチヤした色の諧調をひつそりと紡錘形の身體の中へ吸收してしまつて、カーンと冴えかへつてゐた。私は埃つぽい丸善の中の空氣が、その檸檬の周圍だけ變に緊張してゐるやうな氣がした。私はしばらくそれを眺めてゐた。

不意に第二のアイディアが起つた。その奇妙なたくらみは寧ろ私をぎよつとさせた。

――それをそのままにしておいて私は、何喰はぬ顏をして外へ出る。――

私は變にくすぐつたい氣持がした。「出て行かうかなあ。さうだ出て行かう」そして私はすたすた出て行つた。

變にくすぐつたい氣持が街の上の私を頰笑ませた。丸善の棚へ黃金色に輝く恐ろしい爆彈を仕掛けて來た奇怪な惡漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆發をするのだつたらどんなに面白いだらう。

私はこの想像を熟心に追求した。「さうしたらあの氣詰りな丸善も木葉みぢんだらう」

そして私は活動寫眞の看板畫が奇體な趣きで街を彩つてゐる京極を下つて行つた。

城のある町にて

ある午後

「高いとこの眺めは、アアッ（と咳をして）また格段でごわすな」

片手に洋傘、片手に扇子と日本手拭を持つてゐる。頭が綺麗に禿げてゐて、カンカン帽子を冠つてゐるのが、まるで栓をはめたやうに見える。――そんな老人が朗らかにさう云ひ捨てたまま峻の脇を歩いて行つた。云つておいて此方を振り向くでもなく、眼はやはり遠い眺望へ向けたままで、さもやれやれといつた風に石垣のはなのベンチへ腰をかけた。――

町を外れてまだ二里ほどの間は平坦な綠。I灣の濃い藍がそれの彼方に擴つてゐる。裾のぼやけた、そして全體もあまりかつきりしない入道雲が水平線の上に靜かに蟠つてゐる。――

「ああ、さうですな」少し間誤つきながらさう答へた時の自分の聲の後味がまだ喉や耳のあたりに殘つてゐるやうな氣がされて、その時の自分と今の自分とが變にそぐはなかつた。なんの拘りもしらないやうなその老人に對する好意が頬に刻まれたまま、峻はまた先程の靜かな展望のなかへ吸ひ込まれて行つた。――風が少し吹いて、午後であつた。

一つには、可愛盛りで死なせた妹のことを落ちついて考へてみたいといふ若者めいた感慨から、峻はまだ五七日を出ない頃の家を出て此の地の姉の家へやつて來た。

ぼんやりしてゐて、それが他處の子の泣聲だと氣がつくまで、死んだ妹の聲の氣持がしてゐた。

「誰れだ。暑いのに泣かせたりなんぞして」

そんなことまで思つてゐる。

彼女がこと切れた時よりも、火葬場での時よりも、變つた土地へ來てするこんな經驗の方に「失つた」といふ思ひは强く刻まれた。

「たくさんの蟲が、一匹の死にかけてゐる蟲の周圍に集つて、悲しんだり泣いたりしてゐる」と友人に書いたやうな、彼女の死の前後の苦しい經驗がやつと薄い面紗のあちらに感ぜられるやうになつたのも此の土地へ來てからであつた。そしてその思ひにも落ちつき、新らしい周圍にも心が馴染んで來るに隨つて、峻には珍らしく靜かな心持がやつて來るやうになつた。いつも都會に住み慣れ、殊に最近は心の休む隙もなかつた後で、彼はなほさらこの靜けさの中で恭々しくなつた。道を歩くのにも出來るだけ疲れないやうに心掛ける。棘一つ立てないやうにしよう。指一本詰めないやうにしよう。ほんの些細なことがその日の幸福を左右する。――迷信に近いほどそんなことが思はれた。そして旱の多かつた夏にも雨が一度來、二度來、それがあがる度毎に稍々秋めいたものが肌に觸れるやうに氣候もなつて來た。

さうした心の靜けさとかすかな秋の先驅は、彼を部屋の中の書物や妄想にひきとめてはおかなかつた。草や蟲や雲や風景を眼の前へ据ゑて、祕かに抑へて來た心を燃えさせる、――ただそのことだけが仕甲斐のあることのやうに峻には思へた。

「家の近所にお城跡がありまして峻の散歩には丁度良いと思ひます」姉が彼の母の許へ寄來した手紙にこんなことが書いてあつた。着いた翌日の夜、義兄と姉とその娘と四人で初めて此の城跡へ登つた。旱のためうんかがたくさん田に湧いたのを除蟲燈で殺してゐる。それがもうあと二三日だからといふので、それを見にあがつたのだつた。平野は見渡す限り除蟲燈の海だつた。遠くになると星のやうに瞬いてゐる。山の峽間がぼうと照らされて、そこから大河のやうに流れ出てゐる所もあつた。彼はその異常な光景に昂奮して涙ぐんだ。風のない夜で涼み旁がた見物に來る町の人びとで城跡は賑はつてゐた。闇のなかから白粉を厚く塗つた町の娘達がはしやいだ眼を光らせた。

今、空は悲しいまで晴れてゐた。そしてその

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

下の町は甍を並べてゐた。

白堊の小學校。土藏作りの銀行。寺の屋根。そして其處此處、西洋菓子の間に詰めてあるカンナ屑めいて、綠色の植物が家々の間から萌え出てゐる。或る家の裏には芭蕉の葉が垂れてゐる。絲杉の卷きあがつた葉も見える。重ね綿のやうな恰好に刈られた松も見える。みな黝んだ下葉と新らしい若葉で、いい風な綠色の容積を造つてゐる。

遠くに赤いポストが見える。

乳母車なんとかと白くペンキで書いた屋根が見える。

日をうけて赤い切地を張つた張物板が、小さく屋根瓦の間に見える。——

夜になると火の點いた町の大通りを、自轉車でやつて來た村の青年達が、大勢連れで遊廓の方へ乘つてゆく。店の若い衆なども浴衣がけで、晝見る時とはまるで異つた風に身體をくねらせながら白粉を塗つた女をからかつてゆく。——さうした町も今は屋根瓦の間へ挾まれてしまつて、そのあたりに幟をたくさんたてて芝居小屋がそれと察しられるばかりである。

西日を除けて、一階も二階も三階も、西の窓をすつかり日覆をした旅館が稍々近くに見えた。何處からか材木を叩く音が——もともと高くもない音らしかつたが、町の空へ「カーン、カーン」と反響した。

次々と止まるひまなしにつくつく法師が鳴いた。「文法の語尾の變化をやつてゐるやうだな」ふとそんなに思つてみて、聞いてゐると不思議に興が乘つて來た。「チュクチュクチュク」と始めて「オーシ、チュクチュク」を繰り返へす。そのうちにそれが「チュクチュク、オーシ」になつたり「オーシ、チュクチュク」にもどつたりして、しまひに「スットコチーヨ」「スットコチーヨ」になつて「ヂー」と鳴きやんでしまふ。中途に横から「チュクチュク」と始めるのが出て來る。するとまた一つのは「スットコチーヨ」を終つて「ヂー」に移りかけてゐる。三重、四重、五重にも六重にも重つて鳴いてゐる。

峻は此の間、やはりこの城跡のなかにある社の櫻の木で法師蟬が鳴くのを、一尺ほどの間近で見た。華車な骨に石鹼玉のやうな薄い羽根を張つた、身體の小さい昆蟲に、よくあんな高い音が出せるものだと、驚きながら見てゐた。その高い音と關係があると云へば、ただその腹から尻尾へかけての伸縮であつた。柔毛の密生してゐる、節を持つた、その部分は、まるでエンヂンの或る部分のやうな正確さで動いてゐた。——その時の恰好が思ひ出せた。腹から尻尾へかけてのプリッとした膨らみ。隅ずみまで力ではち切つたやうな伸び縮み。——そしてふと蟬一匹の生物が無上に勿體ないものだといふ氣持に打たれた。

時どき、先程の老人のやうにやつて來ては涼をいれ、景色を眺めてはまた立つてゆく人があつた。

峻が此處へ來る時によく見る、亭の中で晝寢をしたり海を眺めたりする人がまた來てゐて、今日は子守娘と親しさうに話をしてゐる。

蟬取竿を持つた子供があちこちする。蟲籠を持たされた兒は、時どき立ち留つては籠の中を見、また竿の方を見ては小走りに隨いてゆく。物を云はないでゐて變に芝居のやうな面白さが感じられる。

またあちらでは女の子達が米つきばつたを捕へては、「ねぎさん米つけ、何とか何とか」と云ひながら米をつかせてゐる。ねぎさんといふのは此の土地の言葉で神主のことを云ふのである。峻は善良な長い顏の先に短い二本の觸覺を持つた、さう思へばいかにも神主めいたばつたが、女の子に後脚を持たれて身動きならないまに米をつくその恰好が呑氣なものに思ひ浮んだ。

女の子が追ひかける草のなかを、ばつたは二本の脚を伸し、日の光を羽根一ぱいに負ひながら、何匹も飛び出した。

時どき烟を吐く煙突があつて、田野はその邊から展けてゐた。レムブラントの素描めいた風景が散らばつてゐる。

黝い木立。百姓家。街道。そして青田のなかに褪赭の煉瓦の煙突。

小さい輕便が海の方からやつて來る。

海からあがつて來た風は輕便の煙を陸の方へ、その走る方へ吹きなびけ る。

見てゐると煙のやうではなくて、煙の形を逆に固定したまま玩具の汽車が走つてゐるやうで

ある。

サ、、、と日が翳る。風景の顏色が見る見る變つてゆく。

遠く海岸に沿つて斜に入り込んだ入江が見えた。——峻は此の城跡へ登る度、幾度となくその入江を見るのが癖になつてゐた。

海岸にしては大きい立木が所どころ繁つてゐる。その蔭にちよつぴり人家の屋根が覗いてゐる。そして入江には舟が舫つてゐる氣持。

それはただそれだけの眺めであつた。何處を取り立てて特別心を惹くやうなところはなかつた。それでゐて變に心が惹かれた。

なにかある。ほんたうになにかがそこにある。といつてその氣持を口に出せば、もう空ぞらしいものになつてしまふ。

例へばそれを故のない淡い憧憬といつた風の氣持、と名づけてみようか。誰れかが「さうぢやないか」と尋ねてくれたとすれば彼はその名づけ方に賛成したかも知れない。然し自分では「まだなにか」といふ氣持がする。

人種の異つたやうな人びとが住んでゐて、此の世と離れた生活を營んでゐる。——そんなやうな所にも思へる。とはいへそれはあまりお伽話めかした、ぴつたりしないところがある。

なにか外國の畫で、彼處に似た所が畫いてあつたのが思ひ出せないためではないかとも思つてみる。それにはコンステイブルの畫を一枚思ひ出してゐる。やはりそれでもない。

では一體何だらうか。このパノラマ風の眺めは何に限らず一種の美しさを添へるものである。然し入江の眺めはそれに過ぎてゐた。そこに限つて氣韻が生動してゐる。そんな風に思へた。

——

空が秋らしく青空に澄む日には、海はその青より稍々溫い深青に映つた。白い雲がある時は海も白く光つて見えた。今日は先程の入道雲が水平線の上へ擴つてザボンの內皮の色がして、海も入江の眞近までその色に映つてゐた。今日も入江はいつものやうに謎をかくして靜まつてゐた。

見てゐると、獸のやうにこの城のはなから悲しい唸り聲を出してみたいやうな氣になるのも同じであつた。息苦しいほど妙なものに思へた。

夢で不思議な所へ行つてゐて、此處は來た覺えがあると思つてゐる。——丁度それに似た氣持で、えたいの知れない想ひ出が湧いて來る。

「あゝかゝる日のかゝるひとときし」

「あゝかゝる日のかゝるひととき」

何時用意したとも知れないそんな言葉が、ひらひらとひらめいた。——

「ハリケンハッチのオートバイ」

「ハリケンハッチのオートバイ」

先程の女の子らしい聲が峻の足の下で次々に高く響いた。丸の內の街道を通つてゆくらしい自動自轉車の爆音がきこえてゐた。

この町のある醫者がそれに乘つて歸つて來る時刻であつた。その爆音を聞くと峻の家の近所にゐる女の子は我れ勝ちに「ハリケンハッチのオートバイ」と叫ぶ。「オートバ」と云つてゐる兒もある。

三階の旅館は日覆をいつの間にか外した。

遠い物干臺の赤い張物板ももう見つからなくなつた。

町の屋根からは煙。遠い山からは蜩。

手品と花火

これはまた別の日。

夕飯と風呂を濟ませて峻は城へ登つた。

薄暮の空に、時どき、數里離れた市で花火をあげるのが見えた。氣がつくと綿で包んだやうな音がかすかにしてゐる。それが遠いので間の抜けた時に鳴つた。いいものを見る、と彼は思つてゐた。

ところへ十七ほどを頭に三人連れの男の兒が來た。これも食後の涼みらしかつた。峻に氣を兼ねてか靜かに話をしてゐる。

口で教へるのにも氣がひけたので、彼はわざと花火のあがる方を熱心なふりをして見てゐた。

末遠いパノラマのなかで、花火は星水母ほどのさやけさに光つては消えた。海は暮れかけてはゐたが、その方はまだ明るみが殘つてゐた。

暫くすると少年達もそれに氣がついた。彼は心の中で喜んだ。

「四十九」

「ああ四十九」

そんなことを云ひあひながら、一度あがつて次のあがるまでの時間を數へてゐる。彼はそれらの會話をきくともなしに聞いてゐた。

「××ちやん、花は」

「フロラ」一番年のいつたのがそんなに答へてゐる。——

城でのそれを憶ひ出しながら、彼は家へ歸つて來た。家の近くまで來ると、隣家の人が峻の顏を見た。そして慌てたやうに、

「歸つておいでなしたぞな」と家へ云ひ入れた。

奇術が何とか座にかかつてゐるのを見にゆかうかと云つてゐたのを、峻がぽつと出てしまつたので騷いでゐたのである。

「あ。どうも」と云ふと、義兄は笑ひながら、

「はつきり云ふとかんのがいかんのやさ」と姉に背負はせた。姉も笑ひながら衣服を出しかけた。彼が城へ行つてゐる間に姉も信子（義兄の妹）もこつてり化粧をしてゐた。

姉が義兄に、

「あんた、扇子は？」

「衣嚢にあるけど……」

「そうやな。あれも汚れてますで……」

姉が合點合點などしてゆつくり捜しかけるのを、じゆうじゆうと音をさせて煙草を喫んでゐた兄は、

「扇子なんかどうでもええわな。早う仕度しやんし」と云つて煙管の詰まつたのを氣にしてゐた。

奥の間で信子の仕度を手傳つてやつてゐた義母が、

「さあ、こんなは奈何やな」と云つて團扇を二三本寄せて持つて來た。砂糖屋などが配つて行つた團扇である。

姉が種々と衣服を着こなしてゐるのを見ながら、彼は信子がどんな心持で、またどんな風で着附をしてゐるだらうなど、奥の間の氣配に心をやつたりした。

やがて仕度が出來たので峻はさきへ下りて下駄を穿いた。

「勝子（姉夫婦の娘）がそこらにゐますで、よぼつてやつとくなさい」と義母が云つた。

袖の長い衣服を着て、近所の子等のなかに雜つてゐる勝子は、呼ばれたまま、まだなにか云ひあつてゐる。

「『カ』ちうとこへ行くの」

「かつどうや」

「活動や、活動やあ」と二三人の女の子がはやした。

「うううん」と勝子は首をふつて

「『ヨ』ちっとこへ行くの」とまたやつてゐる。

「ようちえん？」

「いやらし、幼稚園、晩にはあれへんわ」

義兄が出て來た。

「早うお出でな、放つといてゆくぞな」

姉と信子が出て來た。白粉を濃くはいた顏が夕闇に浮んで見えた。さつきの團扇を一つづつ持つてゐる。

「お待ち遠さま。勝子は。勝子、扇持つてるか」

勝子は小さい扇をちらと見せて姉に纏ひつきかけた。

「そんならお母さん、行つて來ますで……」

姉がさう云ふと、

「勝子、歸ろ歸ろ云はんのやんな」と義母は勝子に云つた。

「云はんのやんな」勝子は返事のかはりに口眞似をして峻の手のなかへはいつて來た。そして峻は手をひいて歩き出した。

往來に涼み臺を出してゐる近所の人びとが、通りすがりに、今晩は、今晩は、と聲をかけた。

「勝ちやん此處何てとこ？」彼はそんなことを訊いて見た。

「しやうせんかく」

「朝鮮閣？」

「ううん、しやうせんかく」

「朝鮮閣？」

「しやうーせんーかく」

「朝—鮮—閣？」

「うん」と云つて彼の手をぴしやと叩いた。

暫くして勝子から、

「しやうせんかく」と云ひ出した。

「朝鮮閣」

低徊しいのは此方だ、と云つた風に寸分違はないやうに似せてゆく。それが遊戯になつてしまつた。しまひには彼が「松仙閣」といつてゐるのに、勝子の方では知らずに「朝鮮閣」と云

つてゐる。信子がそれに氣がついて笑ひ出した。笑はれると勝子は冠を曲げてしまつた。

「勝子」今度は義兄の番だ。

「ちがひますともわらびます」

「ううん」鼻ごゑをして勝子は義兄を打つ眞似をした。義兄は知らん顏で、

「ちがひますともわらびます。あれ何やつたな。勝子。一遍峻さんに聞かしたげなさい」

泣きさうに鼻をならし出したので信子が手をひいてやりながら歩き出した。

「これ……それから何といふ積りやつたんや?」

「これ、蕨とは違ひますつて云ふ積りやつたんやなあ」信子がそんなに云つて庇護つてやつた。

「一體何處の人にそんなことを云ふたんやな?」今度は半分信子に訊いてゐる。

「吉峯さんのおぢさんにやなあ」信子は笑ひながら勝子の顏を覗いた。

「まだあつたぞ。もう一つどえらいのがあつたぞ」義兄がおどかすやうにさう云ふと、姉も信子も笑ひ出した。勝子は本式に泣きかけた。

城の石垣に大きな電燈がついてゐて、後ろの木々に皎々と照つてゐる。その前の木々は反對に黑ぐろとした蔭になつてゐる。その方で蟬がヂツヂヂツヂと鳴いた。

彼は一人後ろになつて歩いてゐた。

彼が此の土地へ來てから、かうして一緒に出歩くのは今夜がはじめてであつた。若い女達と出歩く。そのことも彼の經驗では、極めて稀であつた。彼はなんとなしに幸福であつた。

少し我儘な所のある彼の姉と觸れ合つてゐる態度に、少しも無理がなく、——それを器用にやつてゐるのではなく、生地からの平和な生れつきでやつてゐる。信子はそんな娘であつた。

義母などの信心から、天理教樣に拜んで貰へと云はれると、素直に拜んで貰つてゐる。それは指の傷だつたが、そのため評判の琴も彈かないでゐた。

學校の植物の標本を造つてゐる。用事に町へ行つたついでなどに、雜草をたくさん風呂敷へ入れて歸つて來る。勝子が欲しがるので勝子にも頒けてやつたりなどして、獨りせつせとおしをかけてゐる。

勝子が彼女の寫眞帖を引き出して來て、彼のところへ持つて來た。それを極り惡さうにもしないで、彼の聞くことを穩かにはきはきと受け答へする。——信子はそんな好もしいところを持つてゐた。

今彼の前を、勝子の手を曳いて歩いてゐる信子は、家の中で肩縫揚げのしてある衣服を着て、足をによきによき出してゐる彼女とまるで違つておとなに見えた。その隣に姉が歩いてゐる。彼は姉が以前より少し瘦せて、いくらかでも歩き振りがよくなつたと思つた。

「さあ。あんた。先へ歩いて……」

姉が突然後ろを向いて彼に云つた。

「どうして」今までの氣持で訊かなくともわかつてゐたがわざと彼はとぼけて見せた。そして自分から笑つてしまつた。こんな笑ひ方をしたからにはもう後ろから歩いて行く譚にはゆかなくなつた。

「早う。氣持が惡いわ。なあ。信ちゃん」

「……」笑ひながら信子も點頭いた。

芝居小屋のなかは思つたやうに蒸し暑かつた。

水番といふのか、銀杏返しに結つた、年の老けた婦が、座蒲團を數だけ持つて、先に立つてばたばた數いてしまつた。平場の一番後ろで、峻が左の端、中へ姉が來て、信子が右の端、後ろへ兄が坐つた。丁度幕間で、階下は七分通り詰まつてゐた。

先刻の婦が煙草盆を持つて來た。火が埋んであつて、暑いのに氣が利かなかつた。立ち去らずに愚圖愚圖してゐる。何と云つたらいいか、この手の婦特有な狡猾い顏附で、眼をきよろきよろさせてゐる。眼顏で火鉢を指したり、そらしたり、兄の顏を盜み見たりする。此方が見てよくわかつてゐるのにと思ひ、財布の銀貨を袂の中で出し惱みながら、彼はその無躾に腹が立つた。

義兄は落ちついてしまつて、まるで無感覺でゐる。

「へ、お火鉢」婦はこんなことをそわそわ云つてのけて、忙しさうに揉手をしながらまた眼をそらす。やつと銀貨が出て婦は歸つて行つた。

やがて幕があがつた。

日本人のやうでない皮膚の色が少し黑みがか

つた男が不熟心に道具を運んで來て、時どきぢろぢろと觀客の方を見た。ぞんざいで、面白く思へなかつた。それが濟むと怪しげな名前の印度人が不作法なフロックコートを着て出て來た。何かわからない言葉で喋つた。唾をとばしてゐる樣子で、褪めた唇の兩端に白く唾がたまつてゐた。

「なんて云つたの」姉がこんなに訊いた。すると隣の他所のひとも彼の顏を見た。彼は閉口してしまつた。

印度人は席へ下りて立會人を物色してゐる。一人の男が腕をつかまれたまま、危ふ氣な羞笑をしてゐた。その男はたうとう舞臺へ連れてゆかれた。

髮の毛を前へおろして、糊の寢た浴衣を着、暑いのに黑足袋を穿いてゐた。にこにこして立つてゐるのを、先程の男が椅子を持つて來て坐らせた。

印度人は非道い奴であつた。

握手をしようと云つて男の前へ手を出す。男はためらつてゐたが思ひ切つて手を出した。すると印度人は自分の手を引き込めて、觀客の方を向き、その男の手振を醜く眞似て見せ、首根つ子を縮めて嘲笑つて見せた。毒々しいものだつた。男は印度人の方を見、自分の元ゐた席の方を見て、危な氣に笑つてゐる。なにか譯のありさうな笑ひ方だつた。子供か女房かがゐるのぢやないか。堪らない、と峻は思つた。

握手が失敬になり、印度人の惡ふざけは益々性がわるくなつた。見物はその度に笑つた。そして手品がはじまつた。

紐があつたのは、切つてもつながつてゐるといふ手品。金屬の瓶があつたのは、いくらでも水が出るといふ手品。——極く詰らない手品で、硝子の卓子の上のものは減つて行つた。まだ林檎が殘つてゐた。これは林檎を食つて、食つた林檎の切が今度は火を吹いて口から出て來るといふので、試しに例の男が食はされた。皮ごと食つたといふので、これも笑はれた。

峻はその箸にも棒にもかからないやうな笑ひ方を印度人がする度に、何故あの男は何とかしないのだらうと思つてゐた。そして彼自身かなり不愉快になつてゐた。

そのうちに不圖、先程の花火が思ひ出されて來た。

「先程の花火はまだあがつてゐるだらうか」そんなことを思つた。

薄明りの平野のなかへ、星水母ほどに光つては消える遠い市の花火。海と雲と平野のパノラマがいかにも美しいものに思へた。

「花は」

「Flora」

たしかに「Flower」とは云はなかつた。

その子供といひ、そのパノラマといひ、どんな手品師も敵はないやうな立派な手品だつたやうな氣がした。

そんなことが彼の不愉快を段々と洗つて行つた。いつもの癖で、不愉快な場面を非人情に見る、——さうすると反對に面白く見えて來る——その氣持がものになりかけて來た。

下等な道化に獨りで腹を立ててゐた先程の自分が、ちよつと滑稽だつたと彼は思つた。

舞臺の上では印度人が、看板畫そつくりの雰圍氣のなかで、口から盛に火を吹いてゐた。それには怪しげな美しささへ見えた。

やつと濟むと幕が下りた。

「ああ面白かつた」ちよつと嘘のやうな、とつてつけたやうに勝子が云つた。云ひ方が面白かつたので皆笑つた。

美人の宙釣り。

力業。

オペレット。淺草氣分。

美人胴切。

そんなプログラムで、晩く家へ歸つた。

病氣

姉が病氣になつた。脾腹が痛む、そして高い熱が出る。峻は腸チブスではないかと思つた。

枕元で義兄が、

「醫者さんを呼びに遣らうかな」と云つてゐる。

「まあよろしいわな。かい蟲かも知れませんで」そして峻にともつかず義兄にともつかず、

「昨日あないに暑かつたのに、歩いて歸つて來る道で汗がちつとも出なんだの」と弱々しく云つてゐる。

その前の日の午後、少し浮かぬ顔で遠くから歸つて來るのが見え、勝子と二人で窓からふざけながら囃し立てた。

「勝子、あれ何處のひと？」

「あら。お母さんや。お母さんや」

「嘘いへ。他所のおばさんだよ。見ておいで。家へはいらないから」

その時の顔を峻は思ひ出した。少し變だつたことは少し變だつた。家のなかばかりで見慣れてゐる家族を、不圖往來で他所目に見る——そんな珍らしい氣持で見た故と峻は思つてゐたが、少し力がないやうでもあつた。

醫者が來て、やはりチブスの疑ひがあると云つて歸つた。峻は階下で困つた顔を義兄とつき合せた。兄の顔には苦しい微笑が凝つてゐた。

腎臓の故障だつたことがわかつた。舌の苔がなんとかで、と云つて明瞭にチブスとも云ひ兼ねてゐた由を云つて、醫者も元氣に歸つて行つた。

此の家へ嫁いで來てから、病氣で寢たのはこれで二度目だと姉が云つた。

「一度は北ムロで」

「あの時は弱つたな。近所に氷屋がありませいでなあ、夜中の二時頃、四里ほどの道を自轉車で走つて、叩き起して買うたのはまあよかつたやさ。風呂敷へ包んでサドルの後ろへ結はへつけて戻つて來たら、擦れとりましてな、これだけほどになつとつた」

兄はその手つきをしてみせた。姉の熱のグラフにしても、二時間おきほどの正確なものを造らうとする兄だけあつて、その話には兄らしい味が出てゐて峻も笑はされた。

「その時は？」

「かい蟲をわかしとりましたんぢや」

——一つには峻自身の不檢束な生活から、彼は一度肺を惡くしたことがあつた。その時義兄は北ムロでその病氣が癒るやうにと神詣でをしてくれた。病氣が稍々よくなつて、峻は一度その北ムロの家へ行つたことがあつた。其處は山のなかの寒村で、村は百姓と木樵で、養蠶などもしてゐた。冬になると家の近くの畑まで猪が芋を掘りに來たりする。芋は百姓の半分常食になつてゐた。その時はまだ勝子も小さかつた。近所のお婆さんが來て、勝子の繪本を見ながら講釋してゐるのに、象のことを鼻捲き象、猿のことを山の若い衆とかやゐんとか呼んでゐた。苗字のないといふ子がゐるので聞いて見ると木樵の子だからと云つて村の人は當然な顔をしてゐる。小學校には生徒から名前の呼び棄てにされてゐる、黨といふ村長の娘が教師をしてゐた。まだそれが十六七の年頃だつた。——

北ムロはそんな所であつた。峻は北ムロでの兄の話には興味が持てた。

北ムロにゐた時、勝子が川へ陷つたことがある。その話が兄の口から出て來た。

——兄が心臓脚氣で寢てゐた時のことである。七十を越した、兄の祖母で、勝子の曾祖母にあたるお祖母さんが、勝子を連れて川へ茶碗を漬けに行つた。その川といふのが急な川で、狹かつたが底はかなり深かつた。お祖母さんは、何時でも兄達が捨てておけといふのに、姉が留守だつたりすると、勝子などを抱きたがつた。その時も姉は外出してゐた。

はあ、出て行つたな。と寢床の中で思つてゐると、暫くして變な聲がしたので、あつと思つたまま、ひかれるやうに大病人が起きて出た。川は直ぐ近くだつた。見ると、お祖母さんが變な顔をして、「勝子が」と云つたのだが、そして一所懸命に云はうとしてゐるのだが、そのあとが云へない。

「お祖母さん。勝子が何とした！」

「……」手の先だけが激しくそれを云つてゐる。

勝子が川を流れてゆくのが見えてゐるのだ！川は丁度雨のあとで水かさが增してゐた。先に石の橋があつて、水が板石とすれすれになつてゐる。その先には川の曲るところがあつて、そこは何時も渦が卷いてゐる所だ。川はそこを曲つて深い沼のやうな所へ入る。橋か曲り角で頭を打ちつけるか、流れて行つて沼へ沈みでもしようものなら助からないところだつた。

兄はいきなり川へ跳び込んで、あとを追つた。橋までに捕へるつもりだつた。

病氣の身だつた。それでもやつと橋の手前で捕へることは出來た。然し流れがきつくて橋を力に上らうと思つても到底駄目だつた。板石と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com